

FKK-K ヌーディスムコレクション

ドイツ語のFKK（裸体主義）という言葉には、重要な、生きる上で大切な人間的な生活という意味が含まれている。それはまた、国、あるいは性別の境界もとっくに超えたものだ。まさに**身体**をのびのびとふるまえる余暇と自分自身を**文化的**に表すことができる可能性なのである。

これは昔、ドイツの大都市で活発な運動として19世紀に始まったものだが、需要が変化した現代においても未だ重要性を持っている。産業化の勢いの中で、急速に発展し、汚染された大都市から、自然の「自由さ」への脱出ということが、特にこの流れにおける最も重要な要求だったのである。当時の洋服を見てみれば、このような流れに行き着くのが当然の結果であつただろうと思われるが、それだけではなく、その時代にとって、余暇と自然さについて表明するためのいかに思い切った行動であったことだろうかということがわかる。絶え間ない技術発展の勢い、人工的な光とともにある居住状況、そして大気汚染された産業的構造物に反して、男性は窮屈なワイシャツの襟から、そして女性は、さらぐつわみたいなコサージュから自由になった。

産業革命に対しての**自然な**アンチ革命。

共同体ということと並んで、喜びということが、この新しい人生構想から広がった基本要素であった。ヌーディストやFKK主義者（裸体主義者）が自然へと向かえば、決して一人ではないし、悲しみにくれた表情になることもない。余暇が意味することは、喜びであり、同時に、美しい芸術で心が満たされたり、表現することを理解したりといった人生のゆとりということなのである。人は、ただ裸だった訳ではなく、一緒に描いたり、踊ったり、音楽を奏でたり、詩を作ったりするのと同様に裸になったのである。いかなる羞恥心や性的な下心なしに、一緒に交流するこの新たに獲得された余暇のとりこになった。まさに人が再び闘って取り戻した天国のような状況だったのである。

こののびのびするという、当時新しく勝ち取られた生活感情は、すぐには、私たちの現在の生活状況における形に置き換えることはできない。しかしながら、余暇についての考え方、特に身体と自然さ及び喜びと**自由時間**からインスピレーションを得ることはできる。それ以前に、いまだ、産業のいけにえという日々の拘束からの身体の解放ということに注目を浴びせるならば、今日では、特に、願いを解放して、隠す事無しに同志の間で「自然に」ふるまうということになるのだろう。エドウィナ・ホールの夏のコレクションは、とりわけ、ありのままなのだ。流行の拘束や、私たちの身体意識に不自然な感覚を植えつける理想美といったことから解放されている。同一化されない、それぞれがそれぞれであるとい

うことと共に、裸の身体の自然さそのものが、様々に変化に富んだ社会で明らかになるよう、美的な基準値そのものである。それは完璧な画一的な身体ではないのである。

個性と仲間との共同体は、画一化と独断的な視点に対立したものである。

エドウィナ・ホールは、FKKコレクションにおいて、この裸体主義の楽しげな哲学をテーマにとりあげ、その生き方についての彼女の新たな解釈を、彼女の布の創造物として表現する。まさに、裸の身体と洋服の関係同様、裸でいることとファッションという関与し合えないように見える関係性は、実は身体ということと離れがたく結びついているのである。何も身に付けていないというところから、その日のために支度をすることがはじまり、夜には再び服を脱ぐ。しかし、彼女にとってはむき出しであるということを表現するとか、衣服からの皮膚の解放を表現するとかよりも、型にはまつた理想美や、あるいは、女性用とか男性用といったように常識的な衣服に対する協議に左右されないで、洋服の中で自由に動くことができる可能性のほうが重要なのである。

そして、ヨーロッパでは、湖や海に並んで森や草原のほうがより多く、裸体主義の営みが行われる場所となっている。つまり、日本では、裸で、現代社会の否定的な効果を飛ばそうとする場所、そう、温泉がまさにその場所になっている。裸でいることは、エドウィナ・ホールにおいては、まさに、私的で彼女の洋服で守られた空間にいるということなのだ。そして、その洋服は必要に応じてすぐに脱ぐことができるものである。

ザビーナ・ムリアレ

翻訳：笠木日南子

更衣室—エデンの現世

1. 私たちは裸で、お互いに親しく呼び合う間柄である。(1932年、裸体主義者の合い言葉)
ヌーディスト

ちょっと想像してみた。: 例えば、ウィーンのアルテドナウや、千葉のヌーディスト専用の浜辺で、自分の大学教授に出会ったら。ヌーディストのためのバーで、厳格な顔つきの髭を生やした男が立って、彼よりも若い彼女との話に没頭している。二人ともいわゆるアダムとイブの服装で、彼女はクラナッハの絵に出てくるような女性に、また彼は、唯一「洋服」として身につけている、この大きな厚いレンズが入った黒い眼鏡のせいで、ウッディ・アレンみたいに見える。間違えようもなく、彼は私の教授なのだ! 今すぐに、どこかからいちじくの葉っぱとか、タオルをさっと持ってくるべきだろうか!? あわわわ、すぐに消えてしまいたい。でも、その瞬間、彼は視線をあげて、二つの目は、驚愕した様子でじっと見つめる。ここで、私は、それ以前の日々のように、大学のゼミでの時のように当然のごとく「こんにちは、ビルケンシュトック教授!」と言うことができるだろうか? ?ともかくも、教授のような眼鏡をかけてはいても、ここでは彼は、彼の地位を失っている。彼はここでは、裸の人であり、裸の人たちの中では、単なる人なのである。

裸でいることは、実際のところ、人々を平等にしてしまう契機を持っている。“服を着ていない状態”においては、私たちは、単なる大衆となるからだ。しかしながら、私たちは「自然のままの子どもたち」にはならないのである。私たちの長年にわたる文明化は、すでにそのことに配慮してきた。私たちはすでにフォーマットされ、形作られている。ヘアスタイルを整え、化粧をする。それどころか、私たちはかなりの的確さでもって、それぞれの裸の人に、それぞれの人にあった服装一式を割り当ててあげることだってできる。私たちは、何も着ていない時には、普通は、服を着ている状態なのだとということを知っているのである。裸でいることへの意識は、その反対の状態、つまり、身体を覆い隠すということがなければ、存在しえないことである。楽園での始原の状態は、楽園からの追放とともに永遠に失われてしまった。アダムとイブがエデンの園を去らなければならなくなつたその瞬間、彼らは自身の性器を守るが如くに手を置いたのである。つまり、「彼らは、自分たちが裸であったことを認識した」のである。いちじくの葉から布に変わるまでは、それほど時間はかかるなかった。

2. 裸体主義はどこから来たのか?
ヌーディスム

100年以上前のベルリンで、よく知られている裸体主義が生まれた。これは、全体的に生活の改善という要求を持った人生哲学とも言えるもので、これは、急速な産業化と都市化に対する補完的な現象として理解されるべきものもある。工場や兵営のように殺風景な団地アパートでの

光のない存在に対して、多くの人々は裸体主義運動に、救済を見たのである。そのことは、身体訓練の教えや、多くの新しい考えに見ることができる。あるいは、『光に向かって叫ぶ』『光の友人』『野外の年頃』『光空浴』『笑いのある生活』『屋外プール』『喜び』『光—大地—太陽』『ボディビルディング—裸体文化』『新時代』等々といった裸体主義雑誌のタイトルなどにも。裸で泳ぎ、裸でボール遊びをし、体操をし、ダンスをし、ギリシャの彫刻としてポーズを取られることだってあった訳だが、一概に健康的な生活として普及された。昔の写真を見ると、儀式的に裸でいるということが目につく。むしろ、太陽崇拜の新たな流儀といった印象を与えていたといったほうがいいかもしれない。

まさに裸だったからこそ、倫理と風紀に関しての厳しい通例の態度が広く行き渡っていた。(しかも、裸でいることは、多くの場合、信頼とか、透明度、あるいは心が開かれているとか、よりよい、そしてより理性的な人間の生活への手段だとされていた。) なので、例えば、空の下で服を脱ぐことは禁止されていたのである。そのために、更衣室があったのだ。人は裸の人の中には、裸で入り込まなければならなかった。今日においては、ほとんどのヌーディスト専用の場所では、服を着ている人も服を着ていない人も、強制されることなく一緒にいられるようになっている。

3. 脱ぐこと

ヌーディズムの光景にエロスを見つけるためには、空想力が必要だ。なぜなら、奇妙なことに、完全に裸でいることは、エロティシズムに対しての免疫が与えられているからだ。というのも、万一にそなえて、それぞれの欲望（これは一番のタブーなのだが）に対する防壁が準備されているし、また状況はあまりにあからさまなのだ。そもそも、見たいと思えば、すべてのものが目の前にさらされるのである。身体を部分に分けて、好奇心を起こさせるような、ほんのちょっとの布もないのである。のぞき見的なことは、せいぜい脱ぐ行為の時ぐらいだ。少しずつ衣服を落とさせることは、親密で個人的な感じになる。服を着ているということから、裸であることへの変わり目が、羞恥心を発動させる。不器用であればあるほど、より興味をそそる。ストリップではその技術形態において、全く反対のことが起こる。脱ぐという技術のもつ芸術的な信頼性が、ストリップダンサーを、まるで洋服であるかのように包み込むのだと、ロラン・バルトは『現代社会の神話』で言っている。それと同じように裸でいるということに対して別の見方もある。日焼けした肌は「二番目の肌」のように肌を包み込む。つまり、素っ裸でいるのは、最初の日だけなのである。

カリン ループレヒタ

翻訳：笠木日南子